

東谷山湿地群周辺における過去400年の環境史：史資料および聞き取りから
400-year environmental history around Togokusan Mountain, Aichi Prefecture,
Japan: Based on historical documents and interviewing

富田啓介（愛知学院大学教養部）

Keisuke TOMITA (Aichi Gakuin University)

1. はじめに

湧水湿地の成立と維持には、周囲の人の営為が強く関与している場合がある。例えば、豊田市の矢並湿地では、砂防工事に伴う築堤が湧水湿地を形成するとともに、未発達集水域の植生がおそらくは湿地の水環境を良好な状態に保っていた（富田2012）。このように、湧水湿地の周囲にどのような人の活動があり、それがどう移り変わってきたのかという点は、湧水湿地の環境変遷の背景として重要である。

2017年に実施された愛知県名古屋市守山区・東谷山北西麓の湧水湿地（以下、東谷山北西麓湿地とよぶ）におけるボーリング調査は、湿地堆積物の層序や堆積物に含まれる物質・微化石等を鍵として、湧水湿地の成立や自然環境の変遷を探ることを目的としたものであった。この東谷山南西麓湿地は二次林に囲まれ、周囲には集落やため池、古墳が点在しており、古くから人の活動が活発な地域であった。本稿は、この湿地の周囲における自然環境並びに人の活動とその変遷を、史資料と聞き取りから明らかにし、それによってボーリング調査で明らかにされた環境変遷の背景の理解に資することを目的とする。

辻野（2011）は、「人から自然へのはたらきかけだけでなく、自然から人にはたらきかけるめぐみや災いなどの要因を意識して、人と自然がどのようなかかわりをもってともに歩んできたのかを描写した歴史」を環境史と定義している。本稿では、このような環境史の考え方に基づいた調査と記述を行うことでみえる、湧水湿地をめぐる環境史を構築する上での課題を洗い出すことも、もう一つの目的とした。

東谷山南西麓湿地の周囲には、希少な動植物が生育・生息する複数の湧水湿地が残存している。本稿では、この総体を東谷山湿地群と呼び、この分布範囲（すなわち東谷山一帯）を対象地域とした。また、比較的史資料が多く残り、また、既往研究によってよく整理もされている近世以降を対象に調査した。現代までの時間軸はおよそ400年間となる。

2. 現在の東谷山湿地群とその周辺の概況

東谷山（198.4m）は尾張丘陵の一角に位置する。山頂を境として、西側は名古屋市守山区（上志段味地区）、東側は瀬戸市（下水野地区）に属する。北麓は庄内川と接し、対岸は春日井市（高蔵寺地区）となる（図1）。

西麓（名古屋市側）には農業公園である東谷山フルーツパークや愛知県立大学看護学部の敷地が広がり、その周囲は果樹園や宅地、石拾池などのため池が点在する。東麓（瀬戸市側）の



図1 東谷山湿地群の位置

北側は、庄内川の支流である水野川の峡谷と接する。その南には東谷山に食い込む浅い開析谷が存在し、この周辺に、近世初期に成立した十軒町の集落と水田がみられる。南麓は、名古屋市と瀬戸市とを結ぶ峠となっており、名古屋市側の石拾池につながる谷には、道路や愛知用水の幹線が通過している。山頂には古代の地方豪族である尾張氏にゆかりがあるといわれる尾張部神社が祀られており、この付近から西麓にかけて多数の古墳が見られる。これは志段味古墳群と呼ばれ、このうち7基が国の史跡に指定されている。

山頂付近から東斜面にかけては、ツブラジイやアラカシからなる常緑広葉樹林が広がるが、東側登山道付近や北斜面にはスギ・ヒノキの植林地も見られる。山麓部はコナラの優占する二次林が広がるが、一部にアカマツ林も残存する。西側の山林は愛知県の県有林であり、愛知県立森林公園の一部となっている。こうした森林の中には、ムササビ・テン・ノウサギ・ニホンカモシカなど多くの野生生物の生息が確認されている（愛知県環境部2011）。

湧水湿地は、南西麓湿地のほか、石拾池上流の谷に点在しており、かつては北西麓にも存在した。シデコブシ・シラタマホシクサなどの地域固有種をはじめ、ミミカキグサ類・モウセンゴケ類など湿地性植物が豊富に見られる。こうした湿地群の一部を包括して、愛知県東谷山自然環境保全地域が設置されている。

湿地群は、地質の分布と関係があるようにみえる。東谷山山頂部と東麓にはチャートを含む

ジュラ紀の堆積岩が分布するが、西側山麓は花崗岩・矢田川層・段丘礫層が順に分布する複雑な地質分布が見られる。東谷山南東麓湿地は、このうち花崗岩と矢田川層の境界部付近にみられる。また、他の湿地も堆積岩と矢田川層の境界など、地質境界付近に多い。

3. 近世期の東谷山湿地群周辺

近世期、東谷山は上志段味村と下水野村の2村の領域にまたがっており、いずれも尾張藩の支配下にあった。また、尾張部神社は尾張藩主の崇敬を受け、藩によって社殿の再建や営繕が行われていた（名古屋市教育委員会2015）。これらのことから、藩政に関連した文書や絵図、また尾張藩域を網羅した地史書には、両村や東谷山に関する記述がみられ、ここから近世の東谷山湿地群周辺の自然環境を伺うことができる。

(1) 山狩の記録から

1644（正保元）年と1645（正保2）年に、初代尾張藩主である徳川義直が東谷山で山狩を行った記録があり、獲物としてシカ・イノシシ・「山犬」の生物名が挙げられている（守山市役所1963；名古屋市教育委員会2015）。つまり、近世初期にはこれらの野生哺乳類が東谷山周辺に生息し、狩りの対象となっていた。「山犬」はニホンオオカミのことと思われるが、生態系上位の生物を養うことができる豊かな自然環境が存在したことが推察される。

(2) 地誌書の記述内容から

1672（寛文12）年に編まれた『寛文村々覚書』は、各村から藩に提出された資料をもとに編まれた村政要覧的な文書である（梶川・溝口2001）。近世前期の社会情勢を示す詳細な数値が村単位に示されている。これによると、上志段味村・下水野村ともに「鹿垣土居」（獣害防止のための構造物）が築かれていることがわかる（上志段味村960間、下水野村1450間）。すなわち、上述したシカ・イノシシ等による獣害が存在していたようである。築造に必要な杓木（丸太）や竹は藩から渡されていたとも記述され、現代の獣害防止柵補助金のような制度があったこともわかる。

また、下水野村の項には、「東谷御林山九十町」との記載があり、東谷山一帯が御林、すなわち藩の直轄林に指定され利用が規制されていたことがうかがえる。ただし御林は、林奉行の許可を得れば必要に応じて伐採できたこと、村持ち分の木があり、林奉行の配下で売買されたことも知られている（瀬戸市史編纂委員会1996）。つまり、まったく手つかずの森林ではなかったようである。御林のほかに、住民が日常的に利用する入会地としての山林（原典では松山などと記載）があったことも知られている（瀬戸市史編さん委員会1996）。こうした山林の林相は不明であるが、同文書の上志段味村の項には「正月城中御飾ノ藪カウジ根引小松当村山ヨリ出ス」との記述もある。すなわち、東谷山周辺の山林にヤブコウジやマツが生育していたこと、正月飾り用に採取され、名古屋城に運ばれたことが理解できる。

『尾張徇行記』は、尾張藩に仕えた樋口好古が、自身の調査・見聞をもとに、1792（寛政4）年から1822（文政5）年にかけてまとめた地誌である（梶川・溝口2001）。『寛文村々覚書』と

比較することで、近世前期から後期に至る百数十年間の社会変化を知ることができる。たとえば戸数および人口をみると、上志段味村は48戸282人から148戸604人へ、下水野村は29戸49人から72戸307人へと大幅に増加している（※）。これは、この間に新田開発が盛んに行われ、耕地面積が増大したこと（瀬戸市史編纂委員会1996）と関係が深いと考えられる。新田開発に伴ってため池も増設され、上志段味村では、4カ所から7カ所に増加している。東谷山南西麓にある石拾池（原典では石ヒロヒ池）は、『尾張徇行記』で初めて名前が出てくるため、この間に築造されたものと思われる。

東谷山湿地群の範囲からやや外れるが、上志段味村と中志段味村の境界を流れる野添川について、「砂ヲビタシク押出セリ」とある。集水域から多量の土砂が流入しているということは、周辺山林の荒廃が背景にあった可能性がある。

（※）『尾張徇行記』によると下水野村の本郷は、1767（明和4）年の洪水でことごとく家が流されてしまい、新田へすべて移転したという。なお、東谷山西麓の十軒家集落は、尾張藩二代藩主（在任：1650年～1693年）の命により本郷から10戸を移転させたのが始まりで、『尾張徇行記』の時代には20戸ほどに増えているという。

（3）絵図等の描画内容から

1813（文化10）年に作成された「玉野川筋上川内禿地絵図面」は、玉野川（庄内川）中流域で発生した洪水により、年貢のとれなくなった川内（堤防の内側）の「禿（つぶれ）地」を調査した結果を記した絵図である（志段味の自然と歴史に親しむ会2001）。この絵図の最上流部に東谷山が写実的に描画されており、植生も詳しく書き込まれている。これによると、東谷山はふもとの玉野川溪谷から山頂部までマツと思われる樹木がびっしりと記されている（図2）。正確な描写だと仮定すれば、当時の東谷山は、少なくとも庄内川から見える範囲（主に上志段味地区）は全体がマツ林だったと思われる。

1841（天保12）年に作成された「春日井郡下水野村絵図面」は、尾張藩が各村に命じて作成させた村絵図のうち、天保期の下水野村を描いたものである。これによると、村域の西側に十軒家と思われる集落が描かれ、その西奥に「東谷大明神」（現在の尾張部神社）と「薬師」が山頂に鎮座する東谷山が描かれている。また、この周辺の山林は「東谷御林」と記されており、先述の地誌書の記述と対応する。田畑のある谷を取り囲む山地の植生は、一様にマツを思わせる絵が書き込まれている（村全体の丘陵地も同様の描写となっている）。

『尾張名所図会』は、尾張藩士や絵師らが執筆した、幕末期の尾張国内の名所を紹介したビジュアル・ガイドブックのような書物である。東谷山（原典：當國山）が紹介された後編は1883（明治13）年に発刊されているが、執筆されたのは1830年代から40年代だといわれる。東谷山の絵（図3）をみると、全山がマツと思われる木でびっしりと覆われているが、所々、地面が剥き出しになっているところもあるようである。また、マツとは異なる、箒を逆さにしたような樹形の樹木も散見されるが、樹種は類推できない。本文の記述をみると、「此山は雌松のみ鬱鬱（をううつ）として、森々たる峻嶺なるが、山の北裏水野川に傍（そ）うたる邊（ほとり）

に、楓樹數株ありて、晩秋の奇觀、錦繡をさらすがごとし」とある。雌松とはアカマツのことであり、この樹種が鬱蒼と茂る様子がわかる。

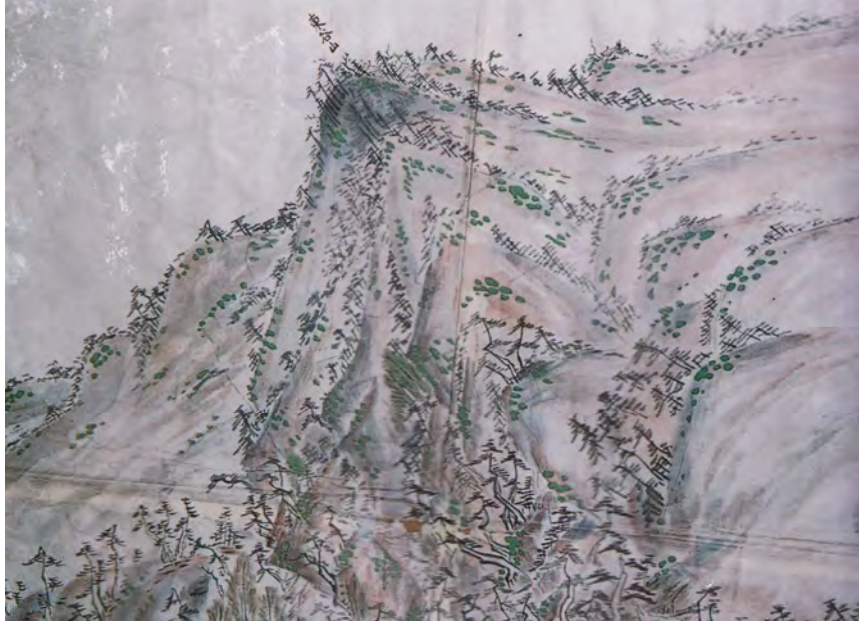


図2 『玉野川筋上川内禿地絵図面』のうち東谷山を描画した部分（志段味の自然と歴史に親しむ会（2001）より引用）

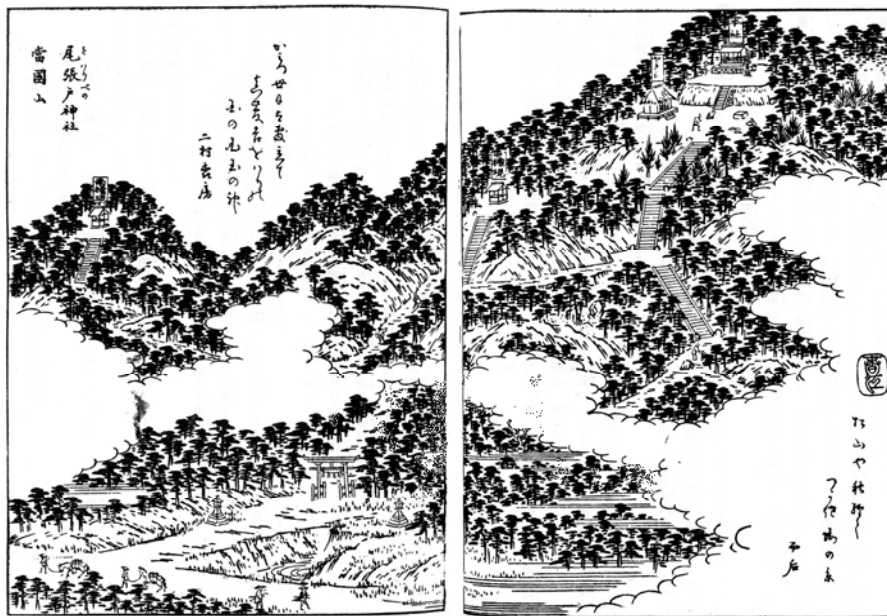


図3 『尾張名所図会』に描かれた東谷山

(4) 小括

近世の史料から、湧水湿地に直接つながる記述・絵画表現を見出すことはできなかったが、湿地群周辺の環境として次のことが理解された。すなわち、1) 御林（藩直轄林）に指定され利用が制限されていたこと、2) 植生は、近世を通してマツ（アカマツ）が卓越した可能性が高いこと、3) 肉食獣や大型獣を含めた多様な野生哺乳類が生息していたこと、4) 山麓部では新田開発がすすめられ多数のため池が築造されたことなどである。

近世の尾張地方の山林では、割り木生産のために広く山林荒廃があったことが知られている。例えば、上述の『尾張名所図会』には瀬戸の陶器生産現場が描かれた図もあるが、その背後にみられる丘陵（東谷山より南東に6kmほどの祖母懐という地名が付されている）は、ほとんど樹木がないようにみえる（図4）。上述の「當國山」の図と比較すると、林相がずいぶんと異なる。すなわち、東谷山湿地群周辺は、尾張部神社の神域であったことや、利用の制限された御林であったことを背景に、極相である常緑広葉樹林ではなかったにせよ、「雌松のみ鬱鬱とし」た状態が維持され、周囲とはやや異なる植生環境が存在したと推察される。

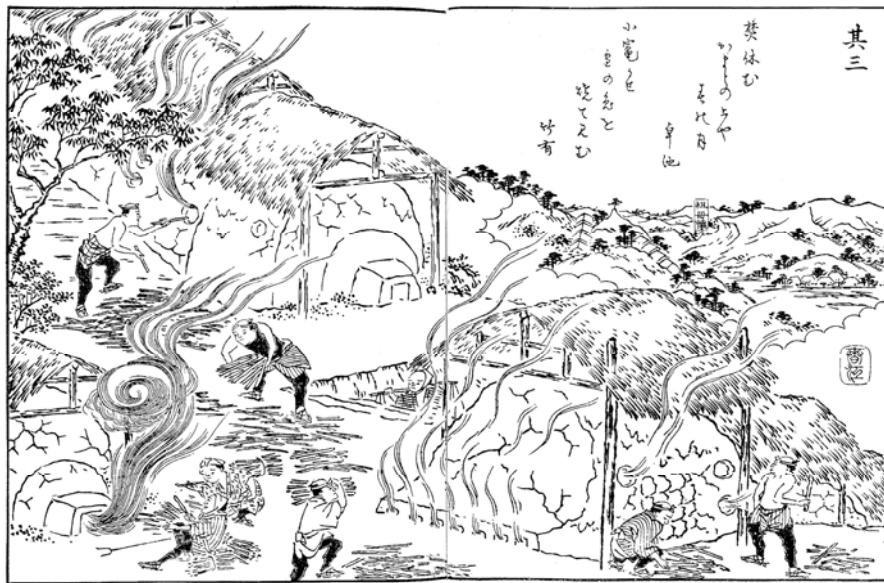


図4 『尾張名所図会』に描かれた瀬戸・祖母懐周辺の丘陵

4. 近代以降の東谷山湿地群周辺の変遷

明治維新後、東谷山湿地群周辺は愛知県東春日井郡に属し、東谷山の西側には志段味村が、東側には水野村がそれぞれ成立した。両村域は戦後、それぞれ名古屋市と瀬戸市の一部となり、現在に至っている。この時期の自然環境・景観および人と自然の関わりの変遷について、地形図・空中写真・各種文献に加え、近隣住民と自然観察者からの聞き取りによって明らかにした。聞き取りを行ったのは、上志段味東谷地区に1949（昭和24）年に入植した農業のA氏（1924生）、中志段味地区でやはり農業を営むN氏（1948生）、また、1950年代から東谷山周辺の自然環境

を観察・研究してきた尾張植物懇話会の飯尾俊介氏の3名で、いずれも2018年6月～7月に実施した。

(1) 明治期の林相と湿地

1891（明治24）年測図の1:20,000地形図『水野』は、東谷山湿地群周辺を範囲とした最も古い実測図である（図5）。これによると、東谷山一帯は広く針葉樹林に覆われている。地図記号から樹種は特定できないが、アカマツと思われる。十軒家集落に隣接した南東斜面の一部と、現在の南東麓湿地周辺のみ矮松地、すなわち未発達のマツ林となっている。この林相は、広い面積で矮松地が広がっている、水野川を挟んで東側の水野丘陵や、南側の現在の森林公園主部がある周辺と対照的である。

また、同図によると、東谷山の南西麓には石拾池がみられるが、その上流の谷は、細長く500m以上にわたって湿地を伴った荒地の記号が記されている。この様相は後述の飯尾氏の記憶と一致し、当時からの谷は広くシデコブシ等のみられる湧水湿地が広がっていた可能性が高い。仮に湧水湿地であったとすれば、このように地図記号に現れる例は珍しい。東谷山山麓からやや離れるが、大久手池の東側も荒地の記号が付されている。ここは地図記号の表記上、湿地を伴っていないものの、地形的に凹地であり、湧水湿地に類した環境があった可能性がある。

(2) 県有林の設置と太平洋戦争期までの林相

愛知県森林公園事務所（1974）によると、1906（明治39）年に御料林800haの払い下げを受け、治山県有林を設定したとある。この一部に東谷山の西側が含まれており、以後、この区域は愛知県の管理下におかれることとなった。昭和9年には、この県有林を利用した愛知県森林公園が開園する。

A氏と飯尾氏によると、森林公園の施設として戦前、東谷山の北西斜面（山頂に至る道路沿い）・南東麓（現在の南東麓湿地周辺）にキャンプ場が設置され、利用された。ただし、戦後には利用されなくなった。やや先の時代になるが、飯尾氏によると、1950年代の南東麓湿地は現在のフルーツパーク駐車場にかかる規模の大きな湿地で、周囲は何もない原っぱだったという。南東麓湿地に隣接した山林内には、キャンプ場の遺構であるカマドが現在もみられる。

東谷山の西側は、このように公有林（御料林・県有林）であったため、近隣住民の立ち入りと利用は、表向き禁じられていた。しかし、N氏によると、東谷山は上志段味の人が薪取り山として昭和30年代頃まで利用していた。これまでの慣行を踏まえてか、大規模な伐採をしないかぎり、立ち入りや利用は黙認されていたようである。A氏も「公園職員に見つからないようにこっそり薪を取っていた。戦時中は（食糧難をしのぐため）畑にしていたところもあるようだ」と語った。瀬戸市史編纂委員会（2002）によると、東谷山の東側も公有林（国有林）であった

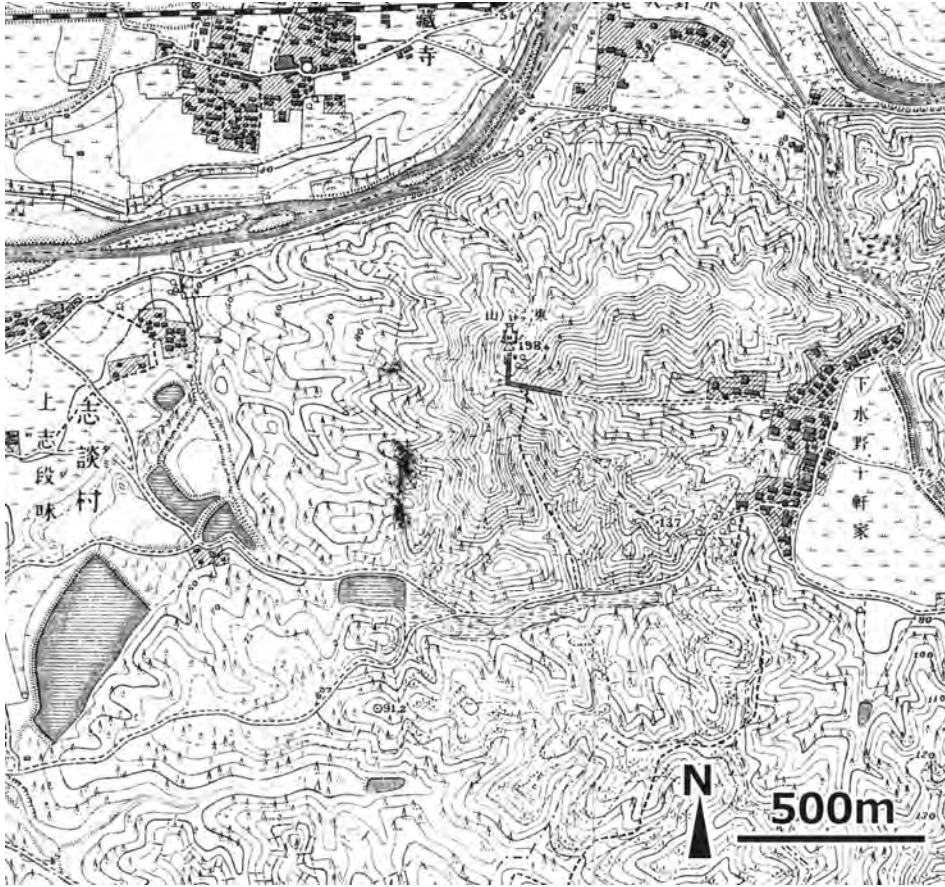


図5 1891（明治24）年測図1:20,000地形図『水野村』（大日本帝国陸地測量部）のうち東谷山周辺

が、「焚きもん山」と呼ばれ、毎年1区画ずつシマに払い下げられていたという。下草刈りに近いもので、鎌の柄よりも太い枝はもちろん、ノコギリでの作業はゆるされなかったとあり、大径木に手をつけることはできなかったようだ。

戦時中は、軍需利用のためか、東谷山で大規模な伐採も行われ、戦後しばらくは「登山路からあたりを見渡せるほど背丈が低かった」という（N氏）。1948（昭和23）年に米軍が撮影した空中写真(図6)をみると、この証言のとおり尾根上の一部に白く見える疎林上の場所があり、そうでない場所も、道がはっきり見えるほどに木が小さいことがわかる。また、上述した石拾池上流の谷には四角形の人工的な区割りの複数確認できる。この部分の土地利用をはっきり判読できないが、湿地を開墾して造られた耕地の可能性はある。

また、尾張丘陵周辺で明治期から昭和初期に行われた自然への働きかけとして特筆すべきとしては、亜炭の採掘がある。N氏によると、東谷山山麓にも亜炭鉱があり、採掘が行われていたという。



図6 1948（昭和23）年5月7日撮影米軍空中写真（国土地理院提供）のうち東谷山周辺（地名等を加筆）

（3）戦後の農地開拓と入植者のみた自然環境

1945（昭和20）年、国は、戦争による失業者への授産と、食料不足の解消を目的として、合計165万haの開拓計画を策定した（愛知県開拓史研究会1978）。東谷山湿地群周辺でも、西麓の24.2ha（以下、東谷山西麓）と、南麓から水野丘陵の一部にかけての132.4ha（以下、水野）において、入植者・増反者を得て開拓が進められた（同）。これらの入植地は、公有林（県有林・御料林）のほか、部落有林（原文ママ）や民有林であった（同）。入植前の植生は、小マツ・ベボ・ヤシャブシ・ハンノキ・ササ・イバラ・ススキ（東谷山西麓）、マツ・クリ、および一部はススキ・ササの密生地や崩壊地（水野）であったといい（同）、この記述から東谷山山麓および周辺丘陵地の痩せた植生状況が垣間見られる。

1949（昭和24）年、A氏が出身地である山梨県から入植したのは東谷山西麓であった。「いい原っぱがある。ニワトリも鳴き、池もある。シデコブシも、ヤマツツジも咲くし、素晴らしいところだ」と感じ心を動かされたことが、入植を決めるきっかけになったという。ヤマツツジの咲く痩せた疎林と、シデコブシの咲く湿地が組み合わさった景観が、入植者の原風景だった。

東谷山はマツ林であった。遠くから見ると目立つため「天狗松」と呼んでいた大きなマツが1～2本あったほかは、似たような大きさのマツばかりだったという。マツタケもよく発生し、最盛期には南京袋で担ぐほど採れた。山林では、ノウサギやリスを見たけたこともあるが、イノシシは入植当時いなかったという。また、周囲のため池は泳ぐことのできる、きれいな水が湛えられ、潜ると冷たかったという。なお、マツタケをはじめとしたキノコの採取は、東谷山

の東側でもおこなわれていた（瀬戸市史編纂委員会2002）。

湿地は当時から各所にあったが、中に入って草刈りをするなどの生活との結びつきはなかった。

（4）愛知用水の通水とトンネル工事の影響

木曾川から水を導き、尾張丘陵から知多半島の産業用水・生活用水を確保すべく開削された愛用水が、1961（昭和36）年に通水した。それに先立つ1959（昭和34）年ころから、用水幹線が東谷山を貫く志段味第一トンネルの工事が実施された。N氏によると、九州で炭鉱の仕事をしていた人たちが、技術・経験を活かしてトンネル工事に携わったという。

用水通水によって、上述した両開拓地にも豊富な水が行き渡るようになったが、その一方でトンネルの南側出口付近に存在していた面積の広い湧水湿地が、残土の埋設や用水路の敷設の結果大部分が消滅した。上述した石拾池上流の湿地も同様に、この工事によってほとんどが消滅した。2018年現在は、両湿地の僅かに残された湿地部分にシデコブシが生育しており、トンネル出口に近い一部は愛知県自然環境保全地域となっている。飯尾氏によると、愛知用水トンネル出口付近の湿地には、1990年代までウメバチソウやサギソウがあったという。

A氏は、志段味の医師がトンネル工事の現場でサンショウウオ（カスミサンショウウオか？）を多く見つけてきたことを記憶している。サンショウウオは湧水の指標となる生物であるため、付近に湧水湿地ないしそれに類した湿地環境が存在していた傍証となる。なお、用水通水後に、愛知用水付近でゲンジボタルが大発生したという。A氏は、取水口のある東濃方面から流れてきたものではないかと推測している。

愛知用水通水と前後する1959（昭和34）年、愛知県地方は伊勢湾台風による大きな被害を受ける。開拓農地も甚大な被害を受けるが、たまたまブドウ栽培を始めており台風来襲前に収穫が済んでいたA氏は、他の入植者にも栽培を勧めた。国の農業振興制度の助けもあって、以後、東谷山西麓ではブドウ畑が増えてゆくこととなる。

（5）高度成長期における植林と宅地開発

1964（昭和39）年に国土地理院が撮影した空中写真によると、1948（昭和23）年の米軍写真と比較して、東谷山の樹木がやや成長しているように見える。また、白っぽい疎林状の場所は、全体として縮小している。一方、東側斜面は一部を残して大部分が伐採され、立木がない。また、北西麓が広範囲に造成され、宅地用の区画ができていることもわかる。南東部には階段状の造成地が造られている。これは、上述した水野の開拓地である。このように、1960年代頃、東谷山湿地群一帯は様々な環境の変化が確認される。

伐採地には植林が行われたようである。志段味資料作成研究会（1979）には「東谷山をほぼ北東から南西へ向けて切った線の東側は、木が切り倒されたあとに、ヒノキが植林されており、高木はほとんど見受けられない。一面に1mに満たない次の植物が、じゅうたんを敷きつめたように生育している」とし、ネジキ・アセビ・コナラ・ソヨゴ・ヤマウルシなどを挙げている。また、山頂の南側から森林公園方面にかけては、アカマツ二次林が成立しているとも記してお

り、この頃までアカマツ林が残っていたようである。

なお、北西部の住宅開発は、A氏によると県有地の払い下げに伴うものであるという。飯尾氏によると、開発前にはここにも面積の広い湿地があり、イシモチソウ・トウカイコモウセンゴケ・カキランなどが生育していた。「今でも夢に出てくるような素晴らしい湿地」だったというが、宅地開発に伴って消滅した。

(6) 高度成長期以降の状況

1977（昭和52）年に国土地理院が撮影した空中写真をみると、疎林上の区画がほぼ消滅するとともに、前述した伐採地に森林が回復しつつあることがわかる。伐採が行われなかった西側斜面では、大きな樹幹を持つ木も目立ち、森林発達が著しい。この頃から、現在の常緑広葉樹を中心とする森林に徐々に移り変わっていったものと思われる。

A氏は、「（入植時と2018年の状況を比べると）山の相は大きく変わってしまった。山は真っ暗になった」と感じている。「真っ暗」という言葉で、常緑広葉樹が増加し林床に光が差さなくなった状態を端的に表現している。このような林相の変化の中で、残された湧水湿地の植生にも変化が表れている。飯尾氏は近年の東谷山南東麓湿地について、「コナラ、アベマキ、リョウブなどの侵入を許し、モンゴリナラやノリウツギ、イヌツゲなどが大きく育って湿地を圧迫して来ている。さらに、湿地内はヌマガヤが優先（原文ママ）し、ミズゴケが増えてシラタマホシクサの生育区域を極端に狭めてしまっている」と記している（飯尾2004）。現在、湿地環境を改善すべく、東谷山湿地群保全の会が保全活動を実施している。

一方で、高度成長期以降に新しく湧水湿地が形成した場所もある。上述した石拾池上流の谷で、1980年代に愛知用水の第二期工事が実施された。この際、資材置き場として造成した場所に湧水が生じ、2018年現在、シラタマホシクサ・イヌノハナヒゲ・ミミカキグサ・モウセンゴケ等の生育する草本類が卓越した植生が成立している。

ところで、戦後の農地開拓も高度成長期以降に様々な変化を経験した。東谷山西麓では開拓地の一部が名古屋市に売却され、1980（昭和55）年、この場所に市営の農業公園（東谷山フルーツパーク）が開園した。これに伴い、石拾池は現在、公園に敷設された釣り池となっている。一方、南麓（水野）の開拓地は、1972（昭和47）年には「兼業農家では不耕作地が目立ち、負債の償還や子供の独立、住宅新築などにより土地を売却したものもある」（愛知県開拓史研究会1978）状況となり、1977（昭和52）年の空中写真からは、南麓の開拓地（水野）のいくらかが放棄され、再び森林化の兆しがあることも読み取れる。その南方では宅地造成が進み、A氏によると「（2018年）現在は、牛を飼っている1軒だけ残る」とのことである。南麓の開拓地は、2018年までに、わずかに耕作が続けられている十軒家集落に近い尾根上の一部を除き、ほぼコナラ等の優占する森林になっている。この場所の一部において、2018（平成30）年初めより、大規模太陽光発電所（メガソーラー）建設のための造成工事が進められている。

(7) 小括

近代以降の東谷山周辺湧水湿地群周辺の林相の変化として、次のことが明らかとなった。

1) 明治期以降高度成長期までは概ね明るいアカマツ林が成立していた、2) 太平洋戦争前後に一時的な森林荒廃が起こっていた、3) 戦後、農地開発によって山麓部の森林の一部が開拓され農地に置き換わり、さらにその後、公園化したり耕作が行われなくなり再森林化したりした場所がある、4) 高度成長期以降、大半のアカマツ林はコナラ林・シイ＝カシ林に遷移するか、皆伐されて植林地となった。

また、湧水湿地群については、次のことが明らかとなった。1) 明治期の地形図に湧水湿地の可能性のある土地被覆が記されている、2) 高度成長期まで多数の湧水湿地が点在した、3) 愛知用水や宅地造成に関わる工事で複数が消滅した、4) 高度成長期以降の林相の変化によるとみられる生育環境の悪化が見られる、5) 高度成長期に新しく形成された湧水湿地がある、6) 近年、湿地群の一部で保全活動が行われている。

5. おわりに

東谷山湿地群周辺では、近世初期（おそらくはそれ以前）から活発な人の活動が見られたことが明らかとなった。その一方で、尾張部神社の神域であることや、御林や国・県有林としての利用規制から、尾張丘陵一帯で広く発生した禿山化を伴うような極端な森林荒廃を免れ、遷移の初期段階にありながらもある程度発達したマツ林が一貫して存続するという、やや特別な自然環境であった。その中でも様々な環境変遷を経験しており、これらをまとめたものが表1である。

さて、湧水湿地は里地里山に分布することが多いため、たいていの場合、その周辺には森林、耕地、ため池のような灌漑設備が広く分布している。これらは人が積極的に利用する（あるいは人の設えた）環境要素である。このような環境要素は、本稿で対象とした東谷山湿地群周辺の例に見るように、比較的古い時代でも明瞭に記録され、その変化を追うことはそこまで難しくない。

一方、湧水湿地のように、人が利用しない環境要素はほとんど記録されることがない。生活・生業上重要な場所でもないため、生活の記憶を鍵に自然環境の変遷をたどる聞き取りでも、その様相を明らかにすることが難しい。ここが、環境史の視点から湧水湿地を検討する際の最大の課題である。

しかし、人の活動と湧水湿地の形成・存続に間接的にかかわりがあることは確かである。したがって、周辺によく記録される環境要素の状況と湧水湿地の状態との関係をつぶさに検討し、結びつけることができるならば、おぼろげながらも湧水湿地の過去の分布が予測でき、また人との関わりの変遷もみえてくるだろう。

謝 辞

N氏・A氏・飯尾俊介氏には、お忙しい中、聞き取りに時間を割いていただくとともに、貴重な資料を頂戴した。また、N氏は石原則義氏、A氏は飯尾氏に紹介をしていただいた。以上の皆さまに深く御礼申し上げます。

表1 東谷山湿地群周辺400年間の環境変遷

世紀	西暦	自然環境	社会環境
17世紀	1600	・1644・45（正保元・2） 初代尾張藩主・徳川義直による山狩（シカ・イノシシ・山犬）	
	1650	・1672（寛文12） 東谷山に御林。鹿垣土居・雨池の記載（寛文覚書） ・この頃 十軒町集落成立	
18世紀	1700		
	1750	・1792（寛政4）-1822（文政5） 東谷山に御林。人口・耕地・雨池の増加（尾張御行記）	・1767（明和4） 水野川洪水、下水野村本郷壊滅
19世紀	1800	・1813（文化10） マツの繁る東谷山（玉野川筋上川内売地絵図面） ・1841（天保12） マツの繁る東谷山（下水野村絵図）	
	1850	・1883（明治13） マツのうっそうと繁る東谷山（尾張名所図会） ・1891（明治24） 針葉樹林の卓越する東谷山。周囲に矮松地。南側に湿地に成立した荒地の存在。（1:20,000地形図『水野村』）	・1889（明治22） 中水野村・上水野村とともに水野村が成立。中志段味村・下志段味村・吉根村とともに志談村が成立。 ・1892（明治25） 上志段味地区、志談村から分村し上志段味村となる
20世紀	1900	・1934（昭和9） 愛知県森林公園開園、キャンプ場整備など（上志段味側） ・1945（昭和20）頃 戦時中、森林の大規模伐採と一部耕地化。森林一部荒廃。低いマツ林。垂炭の採掘あり。（聞き取り、米軍空中写真）	・1906（明治26） 上志段味村、志談村と合併し志段味村の一部となる。御料林払い下げにより県有林が設置（上志段味側） ・1946（昭和21） 東谷山南麓部など入植
	1950	・1959（昭和34）頃 愛知用水幹線志段味第一トンネル建設に伴う南麓部湿地の破壊、ホタルの発生（聞き取り） ・昭和30年代まで、東谷山周辺での薪取り、キノコ採りが行われていた（聞き取り）	・1951（昭和26） 水野村が瀬戸市に合併し、瀬戸市の一部となる ・1954（昭和29） 志段味村が守山町と合併し、守山市の一部となる
	1960	・1960前半頃 北西麓が宅地開発、湧水湿地の消滅。東側斜面の伐採と人工林化。（国土地理院空中写真）	・1960前半ごろ 西麓の入植地にブドウ栽培広がる ・1963（昭和38） 守山市が名古屋市と合併し、名古屋守山区の一部となる
	1970	・1977（昭和52） 東谷山西側斜面、森林発達著しい。常緑広葉樹林化のきざし（国土地理院空中写真） ・1979（昭和54） 東谷山東側斜面はヒノキが植樹され高木がない（志段味資料作成委員会）	
	1980		・1980（昭和55） 東谷山フルーツパーク開園
	1990		
21世紀	2000		
	2010	・2010（平成22） 東谷山にニホンカモシガの生息確認、イノシシ出没するようになる（聞き取り） ・2010（平成22） 東谷山西部が愛知県自然環境保全地域に指定 ・2018（平成30） 西麓旧開拓地周辺にメガソーラー建設始まる	

6. 引用文献

- 愛知県開拓史研究会（1978）『愛知県開拓史 戦後開拓地区誌編』愛知県.
- 愛知県環境部（2011）愛知県自然環境保全地域東谷山（パンフレット）. 愛知県.
- 梶川勇作・溝口常俊（2001）名古屋周辺における近世村の歴史地理. 金沢大学文学論集 史跡・考古学・地理編21：1-40.
- 守山市役所（1963）『守山市史』（編者発行者同じ）.
- 名古屋市教育委員会（2015）『史跡志段味古墳群保存管理計画』名古屋市.
- 瀬戸市史編纂委員会（1996）『近世の瀬戸－ここで作り，ここで暮らした－』瀬戸市.
- 瀬戸市史編纂委員会（2002）『瀬戸市史民俗調査報告書2 水野・掛川地区』瀬戸市.
- 志段味資料作成研究会（1979）『志段味』（編者発行者同じ）.
- 志段味の自然と歴史に親しむ会（2001）『庄内川の今と昔を探る－文化十年玉野川筋上川内禿地絵図面をとおして－』（編者発行者同じ）.
- 辻野亮（2011）日本列島での人と自然のかかわりの歴史. 湯本貴和編，松田裕之・矢原徹一責任編集『シリーズ日本列島の三万五千年－人と自然の環境史1 環境史とは何か』：p33-51. 文一総合出版.
- 富田啓介（2012）湧水湿地をめぐる人と自然の関係史－愛知県矢並湿地の事例－. 地理学評論 85：p85-105.